

博士前期課程・国文学専攻 2026 年度 9 月・英語

問 1

私は近代の日本小説が実現した文学のありようを、それが生れた日常の空間と時間から切り離しながら、だれのものでもなく、いつのものでもないという想像力の本地に置いて、これをあきらかにしようと努めたのである。(同意可)

問 2

つねに必ずしもこれほど明快な発言に出会うわけではないが、このようなアプローチ自体は、日本の文学研究や、より小さい程度であれ、西洋の日本文学研究でも、実に広く行われている。(同意可)

問 3

西洋の学問において文学は、それをさまざまな文脈から切り離してしまうことで理解することのできない、複合的な記号体系として見なされるようになってきた。(同意可)

問 4

さらに重要なことに、私はこの物語が他の発展の諸系列と交差する点(これまで本格的な注意を払われてこなかった点)を考察し、そこから生じたジャンルに新たな光を当てたいと思う。(同意可)

問 5

したがって、日本の自然主義の政治的・知的な歴史は、個々の作品が書かれ、私小説というジャンルが成立した際の背景を提供しただけでなく、その発展を支える要因でもあった。(同意可)

問 6

著者は「蒲団」という作品とその誕生の歴史的な瞬間を詳細に調べ、私小説というジャンルが確立した際の「蒲団」の役割を検討しようとしている。そして当時の政治的・知的な歴史をふまえることで、「蒲団」や私小説をめぐる従来の研究の更新を図ろうとしている。(同意可)

問一

I 西洋文化の本質を見ることなく表面的に真似をするという、適切な判断を伴わない、やみくもな試みのこと。

II 日本の精神的文化は、どれだけ時代が激しく変化したとしても、簡単に消滅してしまうほど、もろくて弱いものではない、ということ。

III 日本の伝統的な文化は、西洋文化の価値基準に照らされて、価値の低いものとして拒否されるようになったということ。

IV 実用性があるかどうかという価値基準が社会に広まり、日本の伝統的な文化や文学の普遍性や現代的な意義について、考える余裕がなくなっているという問題。

V

ア 恐れて服従すること。

イ あっても役に立たず、かえって邪魔になるもの。

問二

※論述問題につき解答省略。

【国文学】

一

I群

a (挽歌)

「雑歌」「相聞」と並ぶ、『万葉集』の三大部立の一つ。その名称は本来、柩をひく時にうたう歌の意だが、『万葉集』では、辞世の歌や伝説上の人物の墓所でうたった歌など、広く人の死を悼む歌を含む。

b (『栄花物語』)

平安時代の歴史物語。宇多天皇から堀河天皇の時代に至る約二百年の歴史を仮名文を用いて編年体で物語風に記し、歴史物語の先駆となった。藤原道長の栄華への賛美を中心に据える。赤染衛門を正編の編者とする説が有力。『源氏物語』の影響を色濃く受けている。

c (源俊頼)

平安時代後期の歌人。『堀河百首』に主導的推進者として参加し、諸歌合において作者・判者として活躍する。題材や表現において既存の和歌に新風をもたらした。白河院の下命により『金葉和歌集』を撰進する。歌論に『俊頼髓脳』、家集に『散木奇歌集』がある。

d (『発心集』)

鎌倉時代初期の仏教説話集。鴨長明編著。出家・遁世・往生等につつまれる説話を集め、各話に長明自身の感想・評論を添える。人の内面を凝視し、自照性が強いのを特徴とする。後続の『閑居友』『撰集抄』などの仏教説話集に大きな影響を与えた。

e (与謝蕪村)

江戸時代中期の俳人、画家。画家として南画を大成する一方で、文人趣味を背景に、浪漫的俳風の作をよくした。芭蕉亡きあと、低迷していた俳諧を復興させ、中興期俳壇の中心的存在として活躍した。作品に『新花摘』などがある。

II群

a (プロレタリア文学)

大正末から昭和初年にかけて展開された、社会主義的ないし共産主義的な革命文学の総体。『種蒔く人』を起点とし、『文芸戦線』や『戦旗』へと続く。昭和七年、国家による激しい弾圧にさらされ、運動は壊滅を余儀なくされた。主な作家・作品に小林多喜二『蟹工船』

や徳永直『太陽のない街』など。

b (自由劇場)

明治四二年、市川左団次と小山内薫によって創立された劇団。ヨーロッパ流の近代劇を日本に取り入れることを目指す試みで、坪内逍遙らの文芸協会と競い合った。第一回試演は、イプセン作、森鷗外訳の『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』で、当時の若者たちに絶大な影響を及ぼした。

c (『田園の憂鬱』)

佐藤春夫による小説で彼の出世作。いくつかの未定稿を経て、「定本」が大正八年に刊行された。憂鬱と倦怠の意識を、感覚と神経の変遷図として分析しつつ、自然をきめこまかく感覚化し、肉体化し、心理化した点に特徴がある。またここに表れた芸術観が、後年の「風流」論に結実することになる。

三

I

問一

むかしおとこありけり深草にすみける
女をやうくあきがたにや思けんかゝるうた
をよみけり

年をへてすみこしさとをいでゝいなば
いとゞ深草野とやなりなん

女返し

野とならばうづらとなりてなきをらん

かりにだにやは君はござらむ

とよめりけるにめでゝゆかむと思ふ心
なくなりけり

問二

(1)

「狩」と「仮」

(2)

おっしゃるように、ここが草深い野となるならば、私は鶉となって鳴いていきましょう。せめ

て狩にだけでも、かりそめにでも、あなたは来てくださらないことがあるでしょうか、きつと来てくださるでしょうか。

問三

自身を鶉となし、自分を狩りに来る相手としてでもよいからまた逢いたいという、切実な思いを吐露した女の歌に、男は心を揺さぶられたから。

II

問一 高浜虚子の小説は、正岡子規が提唱した写生文を出発とするもので、『ホトトギス』を中心に発表された。始めは客観的な観察を主とするものであったが、次第に語り手の主観を押し出すものに変容し、自然主義の小説との類似性を指摘されるようになった。主な作に「風流懺法」「斑鳩物語」「俳諧師」など。

問二 「ある一派」とは、田山花袋を中心とする自然主義を指す。自然主義の文学理念においては、物質的現実には抑圧された小市民の生活、その苦悩を直視する誠実さが評価された。そこで虚子の「余裕のある」小説は遊戯的なものとして、否定的に受け止められることになった。

問三 漱石の作品中、「低徊趣味」の理念を説き、またそれを体現する小説が『草枕』である。しかし漱石はそれを必ずしもよしとしたわけではない。それを証するのが続いて書かれることになった『二百十日』や『野分』で、そこには文明批判的な側面が色濃い。

問四 ペスト対策として当時存在した、交番がねずみを買う上げる制度。これは落語「藪入り」に活かされている。

問五 小説家として長編『俳諧師』や『朝鮮』を連載したものの、『ホトトギス』の経営が次第に悪化したためこれを俳句雑誌として再編成、河東碧梧桐の新傾向俳句に抗し、守旧派を宣言して俳壇に復帰した。『進むべき俳句の道』を連載し、渡辺水巴、村上鬼城らを推奨するとともに、客観写生を強調し、『ホトトギス』の隆盛を導いた。

問六 イギリス留学から帰国後も神経衰弱に悩まされた漱石に、気晴らしとして山会のため、写生文の執筆を勧めたのが虚子だった。ここに書かれたのが『吾輩は猫である』で、これが『ホトトギス』に連載され、漱石は一躍作家として注目を集めることになった。

※論述問題につき解答省略。

【国語学】

問題一

ア（四つ仮名）

かつて音韻上の区別があったジとヂ、ズとヅの四つの音節、およびこれを表す仮名を四つ仮名と呼ぶ。鎌倉時代には、ジ＝[ʒi]、ヂ＝[ʒi]、ズ＝[nz]、ヅ＝[dp]、と音声的に明確な区別があったが、これが[di] < [dʒi]、[du] < [dzu]と破擦音に変化したのち、ジ・ズとの区別を失ったと一般には考えられる。このジとヂ、ズとヅの統合は、『蜷縮涼鼓集』のような仮名遣い書が刊行されたことから分かるとおり、一部の地域を除き、近世には進んでいたと考えられる。

イ（和字正濫鈔）

契沖により編集刊行された仮名遣い書。元禄六年成立、元禄八年刊行。定家仮名遣いの誤りを正す意図で著されたもので、ア・ハ・ヤ・ワ行の仮名遣いのみならず、四つ仮名の問題も取り上げる。平安初期以前、上代の各種文献から広く用例を収集し、実証的な立場を取るが、一部に類推による説明を含む点、問題も残る。なお、江戸時代にはすぐに普及したわけではないが、楫取魚彦『古言梯』などで補訂されて次第に勢力を得ていった。

ウ（P音考）

上田万年が『帝国文学』（一八九八年）に発表したハ行子音は「p」に遡るという論。具体的に言えば、ハ行における清音と濁音の対応が他行と比べ、唯一無声と有声の対応になっていないという内的再構と、「摩訶[maha]」が「マカ」として受け入れられるように古代においては「p」音が存在しなかったなどの、梵語・漢語などの借用語の様相からこの指摘を行った。

エ（形態素）

構造主義言語学における有意味の最小言語形式。発話を意味に応じて分節した最小単位を形態というが、その形態と同じ意味・機能を持ちながら形を異にする形態（異形態）をまとめて、形態素と呼ぶ。たとえば、複合語の要素となる「たな（おろし）」「（と）だな」の「タナ／ダナ」などは、同一形態素の異形態と考えられる。日本語の場合、自立語のうちの単純語、助詞・助動詞、および単語とは認められない接頭辞・接尾辞は、すべて形態素の資格を持つものと考えられる。

オ（大槻文彦）

明治時代の国語学者。蘭学者大槻玄沢の孫。幕末・明治初期に蘭学・英学を学び、文部省

出仕後、国語辞典の編纂を命じられ、『日本辞書 言海』（明治二二～二四年）として出版した。この辞書は近代国語辞書の嚆矢として位置づけられる「普通語」の辞書で、附録として付した「語法指南」も西洋文典の体裁に従った文法書として大きな影響を与えた。

問題二

ア 現代日本語の助詞「は」が格助詞ではなく、係助詞（または副助詞）であることを、

①助詞「は」の主題用法における統語的特性

②助詞「は」の対比用法

について概観するとともに、「AはBがCだ」のような二重主語文の特徴にも触れながらその機能を論じる。

イ 中世に用いられはじめた「である」がどのような過程を経て、近代日本語につながるかについて、

①中世語における「である」の状況

②近世語における「である」の用いられるジャンル

③幕末から明治期における「である」の用いられるジャンルと広がりについて、歴史的な変遷が分かるように論じる。

ウ 現代日本語における文字表記について、

①他言語と異なり、表音文字と表語文字とを併用すること

②表語文字を固有語（訓）と借用語（音）の両者に対応させること

③品詞性や語種に応じて、表音文字と表語文字とを交用すること
の3点から、具体的に論じる。

問題三

※論述問題につき解答省略。

【漢文学】

問題一

(一) 古人の事跡を選び、一句四字、偶数句末で押韻する形式を取り、類似した故事によって対句を成し、その内容は根拠確かな事実でないものはない。これを名付けて『蒙求』と言い、本文は約三千字ある。

(二)

書き下し文 注下転た相敷演し、万余事に向なんとす。

口語訳 注を付し、それをさらに詳しく敷衍し、記載された史実は一万余りに及ぼうとするほど。

(三)

書き下し文 漢朝の王子淵、「洞簫の賦」を製し、漢帝其の文を美とし、宮人をして誦習せしむ。近代周興嗣、『千字文』を撰し、亦た天下に頒ち行はる。豈に『蒙求』に若かんや。口語訳 漢の時代の王子淵が「洞簫の賦」を作ったところ、漢の帝はこれを褒め、宮女に読み習わせた。それより近い時代、梁の周興嗣が『千字文』を撰し、これもまた天下に広く行われた。しかし、これらの作も『蒙求』が人々の為になるのには及ばない。

問題二

※論述問題につき解答省略。